



TITLE:

1-6 HVP2抗原等を用いたマカク血清BV抗体調査と陰性コロニーの作出(X.共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

佐藤, 浩; 大沢, 一貴

CITATION:

佐藤, 浩 ...[et al]. 1-6 HVP2抗原等を用いたマカク血清BV抗体調査と陰性コロニーの作出(X.共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 2005, 35: 92-92

ISSUE DATE:

2005-08-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166174>

RIGHT:

thymocyteに分化・増殖した。一方、強毒・弱毒サル／ヒト免疫不全キメラウイルス(SHIV)をこの培養系に加えると、それぞれ38.1%、44.2%となり、分化が抑制されることがわかった。このことは、ウイルスがその病原性の程度に相関して未分化なT細胞の分化を障害する可能性を示唆するものである。今後さらに例数を増やし再現性を確認すると共に、ウイルス感染によりどのようなメカニズムで分化が抑制されるのか、この系を用いて詳細に検討していきたい。

1-6 HVP2 抗原等を用いたマカク血清 BV 抗体調査と陰性コロニーの作出

佐藤浩，大沢一貴（長崎大・先端生命科学研究所支援センター）

B ウイルス(Cercopithecine herpesvirus 1)は自然宿主のサルでの致死感染は例外的であるが、ヒトに感染すると致死的な疾患を引き起こすことが知られている。このことから、簡便な抗体検出用のキット開発が求められているが、国内ではB ウイルスの大量培養による抗原作製は不可能である。最近B ウイルスと近縁のヒヒヘルペスウイルス (HVP2) 抗原が抗体検出に非常に有効であることが報告された (LAS, 1999)。そこで本実験施設では、HVP2 抗原を用いたB ウイルス抗体検出用 ELISA キットを作製し、希望する研究機関に頒布すると共に、キットの安定性の調査および操作性の向上を図るため、頒布先の機関よりキットを用いた検査結果と検査血清の送付を依頼している。今回、1976年から2003年にかけて京都大学霊長類研究所で採血されたニホンザル血清 793 検体についての検査を行ったので報告する。

【材料と方法】

検査材料 -80℃で凍結保存。**抗原** B ウイルスの代替抗原としてヒヒヘルペスウイルス (HVP2) 抗原を Vero 細胞に感染させ、36-48 時間後に感染細胞を回収し、可溶化後、遠心上清をウイルス抗原液とした。対照として非感染 Vero 細胞抗原を用いた。**反応と発色** 96 穴プレートに 200-800 倍希釈ウイルス抗原をコートし、抗原プレートとした。発色にはビオチン化抗ヒト IgG、アビジン・ビオチン化ペルオキシダーゼによる増幅を介し、OPD を基質として発色させ、硫酸にて停止後、波長 492nm における吸光度を測定した。

【結果】 検査の結果、陽性：229、陰性：557、不定：7 となり、陽性率は約 29% (229/793) であった。2001 年以降、陽性率が 10%前後を推移し、それまでの約 40%に比べて大きく低下していた。SPF コロニー作出が本格化していることがうかがえた。99 年・00 年ロ

ットに比べて、01 年・03 年キットは発色がやや不良で OD 値が低めとなったが、診断キットの根幹である「陽性・陰性の判定」の点では、長崎で行った診断結果(追試)と差異はなかった。04 年ロットは、抗原濃度を 99 年レベルにまで戻し(上昇し)たので、良好な検査結果が得られるものと期待している。

2-1 ウマヤザル信仰に伴う頭蓋骨の調査による口承と生息分布域の相関関係

中村民彦

ウマヤザル信仰とは既に猿の頭蓋骨や手を祀り牛馬の健康や安産などを祈願したものである。当信仰は東北全域に流布していたが、近代から現代における残留形態や口承の全容は充分に解明されていない。更に、これに関係するニホンザルの捕獲や捕殺の方法も不明である。今年度も当風習を知る古老からの口承を求め、聞き取りにより記録し、ニホンザルの生息分布との関係を明らかにしようと岩手県を中心に調査を行った。調査の結果、従来発見されている事例も加えると軽米町 1、山形村 6、久慈市 1、野田村 1、玉山村 1、雫石町 2、新里村 2、沢内村 1、東和町 1、北上市 2、江刺市 1、胆沢町 1、大東町 1、前沢町 2、藤沢町 2、平泉町 1 の計 26 の事例を記録する事ができた。保存形態の内訳は頭蓋骨 22、手 4 である。頭蓋骨では牛馬の守護神、薬用、安産、火災防止などの口承事例を得た。手については種蒔き時に使用すると豊作との口承事例を得た。頭蓋骨には無病息災や家内安全を、手には五穀豊穡をと、祈願の内容に使い分けが認められる。一方、捕獲や捕殺の方法を詳細に知るインフォーマントは発見できなかった。当信仰が広く分布し、こうしたサルの需要にサルマタギのような供給者が関与していたなら県下のサル生息地の消失を招いた狩猟圧の原因になった可能性も考えられる。ウマヤザルの風習とニホンザルの分布空白域との関係については、次年度以降の調査で更に検討を重ねていきたい。

2-2 GIS を用いたニホンザルの行動圏利用に関わる要因の評価

辻大和（東京大・院・農学生命科学）

本研究ではニホンザルの行動圏利用に関わる諸要因を定量化し、各要因がニホンザルの生息地利用に与える影響の相対的な重要性を把握することを目的とする。本年度は、泊まり場の選択と温度環境の関連性を示すことに重点を置いた。宮城県金華山島北西部の様々な地形 6 タイプ 10 箇所(尾根×3、沢×3、海岸、